

主 題：謙遜であれ

聖書箇所：コリント人への手紙第一 4章6－13節

「高ぶりはただ争いを生じ…」(箴言3：10)とソロモンが語った通り、プライド・高慢は大変恐ろしいものであり、神の栄光を汚すものです。この高慢こそがコリント教会の問題でした。そのことは私たちはもうすでに見て来ました。パウロは彼らが何とかそのことに気付いて変えられることを願うのです。そして、今から見ようとしているIコリント4：6からも、彼らの過ちを四つの事柄を用いて矯正しようとしています。今朝はそのことをごいっしょに見ていきます。

☆パウロがコリント教会の問題を矯正しようとしたその方法

1. 自分たちの模範を通して 6節

6節「さて、兄弟たち。以上、私は、私自身とアポロに当てはめて、あなたがたのために言って来ました。それは、あなたがたが、私たちの例によって、「書かれていることを越えない」ことを学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して高慢にならないためです。」、ここに「当てはめて」ということばがあります。これは「変化」と「外観」という二つのことばから成る合成語です。つまり、「姿を変える、形を変える」ということです。パウロは比喩的描写を自分たちに適用して来たと言います。確かに、パウロは自分たちのことをいろいろな比喩的表現を使って語って来ました。

たとえば、3章では「農夫」というたとえを使っています。「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。」(3：6)、また、「与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。」(3：10)、「農夫」や「建築家」という比喩的表現を使って自分たちのことを説明しました。前回見たように、4：1には「こういうわけで、私たちを、キリストのしもべ、また神の奥義の管理者だと考えなさい。」と、「キリストのしもべ」「神の奥義の管理者」と言っています。

なぜ、パウロはこのように自分たちのことを比喩的表現を使って語ったのでしょうか？6節に「あなたがたのために言って来ました。」と言っています。つまり、コリント教会の人たちが大切なことを学ぶためにこのような比喩的表現を使って自分たちのことを説明したのです。その理由は、皆さんお分かりのように、コリント教会の人たちはパウロたちを特別視していたからです。彼らに対する見方、扱い方が間違っていたのです。そこでパウロは、どのように扱うべきかを教えたのです。そのことはすでに見ました。

6節を見ると、その説明をした後、彼らが学ばなければならない二つのことを記しています。

◎コリント教会が学ぶべき二つのこと

6節に「あなたがたが、私たちの例によって、」と、自分たちの比喩的表現をもって説明して来たこと、そのことによって「書かれていることを越えない」ことを学ぶため、と言います。二つ目に「一方にくみし、他方に反対して高慢にならないためです。」と言っています。

1) 書かれていることを越えない

これは「聖書の教えから逸脱しない」ということです。コリント教会の人たちは確かに聖書のみことばを学びましたが、悲しいことに、人間的なこの世的な思いが入り込むことによって、人間的なものの見方をするのです。人々をひいきするなど偏見が生じてしまうのです。パウロはすでに教えたように、私たちクリスチャンはみな兄弟姉妹であって、そこには優劣は存在しません。みな神の前に大切な存在なのです。みなが平等です。でも、神はそれぞれに異なった霊的賜物を与えました。ということは、ひとり一人に異なった働きが与えられているのです。

ところが、人間的な思いや考えが入り込むことによって、人の働きや人の価値を人間的な基準で判断してしまうことになるのです。どちらの人に価値があるのか？どの働きに価値があるのか？というようになります。コリント教会はパウロたちを特別視したのです。確かに、みことばには教会のリーダーたち、長老たちへの教えが記されています。Iテサロニケ5：12、13「:12 兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。:13 その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。お互いの間に平和を保ちなさい。」、彼らに尊敬を払うことは聖書が教えていることですから、そこに留まっているなら教えから逸脱することはありません。ところが、コリント教会の人たちは自分の愛するリーダーを他のリーダーたちと比べて特別視してしまったのです。

この教会にはいろんな分派が存在して、その中に「キリスト派」というグループがあったことはすでに見て来ました。このグループの人たちは正しかったのです。なぜなら、「私たちはキリストに属す

る」として、キリストを誇りとしていたからです。ところが、この教会には1章で見ましたが、「あなたがたはめいめいに、「私はパウロにつく」「私はアポロに」「私はケパに」「私はキリストにつく」と言っているということです。」（1：12）と、キリストを使徒たちと同列に並べています。ということは、この教会にはパウロたちをキリストと同等に扱っている者たちがいたのかもしれませんが。これは大変大きな問題です。どんなに尊敬に値する人であってもキリストと同列に並ぶことは有り得ません。ですから、この教会はある特定のリーダーを特別視してしまうことによって、教会の中に分裂分派を生じさせてしまったのです。こうして、彼らは聖書の教えから外れてしまっていたのです。

ですから、パウロはそのようなことがないように、書かれていることを越えないために、キリストにある働き人とはどういう人かを教えて来たのです。

2) 一方にくみし、他方に反対して高慢にならない

パウロが教えたかったことは「高慢は罪だ」ということです。これはすべての信仰者に共通していることです。「高慢になる」とは「膨れさせる、誇らせる」という意味です。自分のことを誇っているのです。先ほども話したように、コリント教会は自分の好みのリーダーを選んで彼らを誇ると同時に、他のリーダーたちやその信奉者たちに反対して、彼らを見下していたのです。「私のリーダーの方が素晴らしい、あなたたちのリーダーは…、そんなリーダーに従っているのか？」と彼らを見下すようなことをしていたのです。「我々の選択は正しい。このリーダーはだれよりも優れている。」と、自分たちの選択を誇り、同じ選択をしていない人たちを見下していた、このようなことが教会の中に生じていたのです。

繰り返しますが、「高慢」は神が憎まれているものです。「【主】を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりと、おごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。」（箴言8：13）とソロモンは言っています。ヤコブも「ところがこのとおり、あなたがたはむなしい誇りをもって高ぶっています。そのような高ぶりは、すべて悪いことです。」（ヤコブ書4：16）と言います。ここに教会の問題があったのです。

この「プライド」という問題を抱えたコリント教会に対して、彼らの過ちを責めるのですが、パウロはこの後も続けて彼らを諫め続けています。

2. 質問を通して 7節

7節「いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」、二つ目に、パウロが彼らを矯正しようとするその方法は、質問を通して彼らに彼らの過ちに気付かせようとするのです。ここに三つの質問があります。

1) いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか

「すぐれた者」、この世の人々は思ったのです。他の人たちに比べたら自分たちは優れているとか、他の人たちに比べたら自分たちは重要であると。そこでパウロは「いったいだれがあなたをすぐれた者と認めるのですか？結局、認めているのは人間ではないですか？」と、自分をすぐれた者と自負し人からもそのように見られたい…、それは人間の評価に過ぎないと言うのです。あなたの独りよがりだと。

人々がどんなにあなたを称賛したとしても虚しいことです。なぜなら、彼らは本当のあなたを知らないからです。ですからパウロは、いったいだれがそんなことを言っているのか？と問います。彼らは人々の中にあって、自分はすぐれていると思い込みたかったし、人からもそのように見られたかった。結局はプライドなのです。

2) あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。

二つ目の質問はこれです。「すべてもらったでしょう」と言います。たとえば、私たちがこうして生きているこの「いのち」はどこから来ましたか？偶然にいただいたものではありません。これは神が私たちに目的をもって与えてくださったものです。あなたに与えられている「才能」はどうですか？これは霊的賜物とは違います。神があなたに与えてくださったものです。音楽の才能、スポーツの才能、芸術の才能、いろいろな才能があります。それらを神はくださったのです。もちろん、それらを神のために用いなさいと言われる。霊的賜物が与えられています。これはイエス・キリストを信じた後、信じたひとり一人に与えられます。ひとり一人に異なった賜物が与えられます。それはあなたの努力で勝ち取ったものですか？違うでしょう？神からいただいたものでしょう？と。

また、私たちが生まれ育った「家系」はどうでしょう？偶然その家系に生まれたのではない、神がここに置いてくださったのです。自分たちの先祖にしても親にしても…。私たちが生まれ育った「国」はどうですか？なぜ、私たちはこの国に生まれ育ったのでしょうか？偶然なのでしょう？神が置いてくださったのです。神がこの国に生まれるようにしてくださった。人間的に見て「あの国に生まれたら良かったのに、こんな国に生まれていやだ。」とかいろんな思いがあるでしょう。でも、私たち信仰者は神

がご自身の計画をもって私をこの国に置いてくださったと考えるべきです。ここが私たちの宣教地なのです。私たちの必要はどうですか？神はちゃんとくださっています。そして、「永遠のいのち」は？私たちが努力をしたから得たのではなく、すべて神からの恵みです。

つまり、パウロが言うことは「あなたがたはこのような祝福をもらっていないかのように振舞っている。間違っていないか？すべていただいたのでしょうか？だから、どっちが良いとかどっちが悪いとか、どっちがすぐれてどっちが劣っているとか、そんなことを考えることがナンセンスだ」ということです。

3) もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか

すべては自分で得たのではない、すべていただいたもののなのに、自分で得たかのように誇っている、自慢し合っていると言います。私たちが何を持っているかを自慢するのではなく、私たちに与えてくださった神を自慢するべきです。

こうしてパウロは、彼らの独善性に気付かせようとしします。彼らのフォーカスは自分だった、神ではなかったのです。その間違いをパウロはこの三つの質問をもって彼らに指摘するのです。

3. 間違いの矯正を通して 8節

8節を見ると、パウロは高慢の罪に陥っている彼らに、今度は手法を変えて彼らを諷めています。「あなたがたは、もう満ち足りています。もう豊かになっています。私たち抜きで、王さまになっています。いっそのこと、あなたがたがほんとうに王さまになっていたらよかったのです。そうすれば、私たちも、あなたがたといっしょに王になれたでしょうに。」、パウロは彼ら自身の問題を矯正することを通して彼を正しく導こうとします。彼らの間違いを指摘して正しく導こうとするのです。彼らは二つの点において間違っていたのです。

1) 救いに関する彼らの過ち : 彼らの問題点は、信仰者として行き着くべき所にもう自分たちは到達したかのように思っていることです。「あなたがたは、もう満ち足りています。もう豊かになっています。」と、「もう」とは「すでに」ということです。そのような境地にあったということです。「満ち足りています」、これは「満足する、満腹させる、飽きさせる、もう十分だ、もう要らない」という意味です。「豊かになっています」も「豊かに恵まれている」ということです。つまり、彼らは何も不足を感じていない、もう十分だと言うのです。どのような時にこんな思いを持つのか？もし、その人が永遠のいのちをいただくことを信仰のゴールとしているなら、救われたときにその満足を持ちます。「もう私は救われました。もうゴールに到達しました。もうこれ以上のことを私は望みません。なぜなら、それが私の望みだったから。」と、まさに満腹状態だと言えるのです。パウロはその生き方は間違っていると言います。なぜなら、パウロは救いに与った後「もう私は十分です」とは言っていないからです。

誤解を除くために言いますが、神が成してくださった救いのみわざは十分です。100%完璧です。神の成してくださったみわざに私たちが何か加えなければいけないのか？何か加えないと救いに与らないのか？そうではありません。イエスは完璧な救いを備えてくださり、私たちは信仰によってそれに与ることができるのです。神の成されたみわざは完璧です。

では何のことを言っているのか？これは私たちの信仰生活のことです。私たちは信仰者としても今の自分に満足し切っているのか？そうではないのです。パウロは「自分の救いを達成してください」とピリピ書の中で言っています。ピリピ2:12「そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いの達成に努めなさい。」、

まだ救いに達していないからこのように言っているのでしょうか？先ほども話したように、これは「罪からの救い」ではなくて、救いに与った者たちの「信仰者としての歩み、信仰生活のこと」です。よりイエスに似た者へと変えられていくという、その信仰者としての歩みのことです。

パウロは同じピリピ書の3:12-15でこのように言います。「12 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。」、まだ満足していないのです。まだそこに到達していないからです。「ただ捕らえようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。:13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えてはいません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、:14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」と、どんな姿かを描くことができます。ゴールに向かって走っている様子です。「:15 ですから、成人である者はみな、このような考え方をしましょう。もし、あなたがたがどこかでこれと違った考え方をしているなら、神はそのこともあなたがたに明らかにしてください。」

そうすると、コリントの人たちはもう満腹状態にあって「もう十分、十分、もうゴールに到達した」と言いますが、パウロは「とんでもない。今始まったところだ。」と言うのです。確かに、このパウロ

のメッセージと同じことをイエスが言っておられます。マタイの福音書 5：6「義に飢え渴く者は幸いです。その人たちは満ち足りるから。」と、「義に飢え渴く」、もっと神の前に正しくありたい、もっと神の前に聖くありたい、そのような願いを持って生きている人です。そのようにして生きるのだということをイエスは教えてくださっていますから、私たちはそうして生きるのです。

確かに、救いは約束されました。永遠のいのちが約束されています。しかし、まだ私たちはこの地上に置いていただいている間は成長していくことが必要なのです。イエスに似た者へと変えられ続けていくことが必要なのです。義に飢え渴く者として、より主が喜んでくださる者へと成長していくように、そのことを願いながらそのように歩いていくのです。ですから、パウロはイエスから教えられたようにゴールを目指して一心に走っていました。でも、気付かれるでしょう？コリント教会の人たちはそうではなかったのです。彼らが見落としていたのは大切なことです。それは「救いとは、神の栄光を現すという本来の生活へのスタートだということ」です。やっと神の栄光を現すその生活がスタートしたのです。それが救いなのです。そして、私たちが日々の生活において主のみこころに従うその歩みに、本当の満足が付随しているのです。神にあって本当の満足を得ようとするなら、方法は簡単です、神のみこころに従えば良いのです。そのときに神の祝福があるからです。こうして私たちはこの地上の生活を歩み続けていくのです。でも、彼らはもうあたかも自分たちはゴールに到達したかのように思っていたので、その過ちをパウロは矯正するのです。

2) 千年王国に関する誤ち： というのは8節に「私たち抜きで、王さまになっています。いっそのこと、あなたがたがほんとうに王さまになっていたらよかったのです。そうすれば、私たちも、あなたがたといっしょに王になれたでしょうに。」と書かれています。確かに、このパウロのメッセージには聖い皮肉が込められているように思います。彼らはもうすでに「王さまになっています」とあります。これは「統治する、支配する」という意味があります。ということは皆さん、確かに、聖書の中には救いに与った者たち、私たちはイエスとともにこの地上を治めるという約束があり、私たちはそのことを知っています。

例えば、黙示録 5：10には「私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。」とあって、つまり、救いに与った私たちへの約束です。後に、私たちはイエスとともにこの地上を治めるのです。でも、それは今のこの時代ではありません。後の時代です。空中再臨があって、そして、7年間の患難時代があって、その後私たちは地上に帰って来ます。その後のこと、千年王国でのことです。ですから、黙示録 20：6に「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。」と、そのようにみことばは教えています。でも、私たちがイエスとともに王として治めるのは今話したように、今のこの時代ではありません。千年王国でのことです。

でも、コリントの人たちはもう王さまにされたのだと、そのように思っていたのです。彼らが間違っていることをパウロはこのように言っています。「私たち抜きで、王さまになっています。」と。「私たちを除いて」ということです。つまり、パウロたちの同行や同伴なしで自分たちだけが王さまになっていると、そのようにパウロは指摘するのです。皆さん、そんなことは有り得ないことですね。彼らが王になっているならパウロたちも王なのです。そこに間違いがあることをパウロは指摘するのです。

パウロは少し皮肉を込めて「いっそのこと、あなたがたがほんとうに王さまになっていたらよかったのです。」と言います。その理由が次に書かれています。「そうすれば、」という接続詞に続いて「私たちも、あなたがたといっしょに王になれたでしょうに。」と、もし、彼らが考えるように、今が千年王国なら自分たちは王としてこの地上を治めることになる。その日を待ち望んでいる者として、私たちはそのように願うけれど実際には違う、今はまだ千年王国ではないと、そのことをパウロは言うのです。

こうして、二つの彼らの間違った考え、思いをパウロは明らかにして、そして、その上で、今私たちがこの地上に置かれているということは、主のすばらしさをこの世に示すという、大きな、そして、大切な務めを果たし続けていくためだと言います。彼らのこういう誤った考え方がその歩みの妨げになっていたのです。「もう私は十分だ。ゴールに到達した。」と、あたかももう自分は王になったかのように考えていた彼らに「違う！あなたがたは間違っている！」とパウロは彼らを教えるのです。

4. 自分たちとの違いを通して 9-13節

そして、9-13節でパウロは、自分たちの姿を明らかにすることによって、彼らが持っている考え方との違いを通して、「あなたがたは間違っている」ということを説明するのです。この箇所でパウロは、自分たちが今この世にあってどのような存在なのかということを改めて教えます。それによって、彼らが持っていた考えと実際とがどれほどかけ離れているのかを教えようとするのです。

1) この世の見せ物 9節

「9 私は、こう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、行列のしんがりとして引き出されました。こうして私たちは、御使いにも人々にも、この世の見せ物になったのです。」、これがパウロが最初に

言うことです。我々は「見せ物」だと。しかも、「死罪に決まった者のように、行列のしんがりとして引き出されました。」と、何かの行列のことです。コリント教会の人たちは自分たちのことを王と見ていたのです。しかし、パウロは違いました。パウロは自分たちのことを「見せ物である」と見ていたのです。そ

して、そのことを説明するためにパウロは、コリントの人たちもよく知っていた勝利の凱旋パレードというたとえを引き合いに出すのです。

「勝利の凱旋パレード」とは、ローマの将軍が敵に対して大勝利を治めたときにこのようなパレードがなされたのです。その時の光景は、まず最初に将軍が歩きます。その後に兵士たちが続きます。そして同時に、そこに戦利品がずっと続いて行進をします。それを見ている群衆たちは「こんなものを得たのだ！こんな大勝利を治めたのだ！」と言ってその将軍を称えるのです。その行進の一番最後に、実は、この後野獣と戦って死ぬ運命にあった捕虜たちが鎖につながれて歩いて行ったのです。彼らは沿道の群衆からすればいい見せ物だったのです。この後この人たちは野獣と戦って殺されていく…、パウロはそのことを引き合いに出して、それがまさに我々の姿だと言うのです。パウロは自分たちのことをまさに、「死罪に決まった者のように、」、行例の最後に鎖につながれて引いて行かれる捕虜のように見ていたのです。この世の人々から嘲笑され、蔑まれ、そして、最終的にキリストのために死ぬ者たち、それが私たちだと言うのです。実際に、このパウロたちはこの後キリストのために殉教していきます。我々はこの世にあって見せ物にすぎないと言います。

2) この世の愚か者 10 a 節

「10 私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあって賢い者です。」、この世の中が使徒たち、パウロたちをどんなふうに見たのか？世の中の評価は「この人たちは愚か者だ」でした。ところが、コリントの人たちは「賢い者」だと、世の中の彼らに対する評価がこのように記されています。なぜなら、彼らはこの世の知恵をより多く得ることによって人々から尊敬されることを願っていたからです。救われた後もその思いが強かったのです。それを彼らは追い求めていた、人々からの称賛です。世の中から誉められることを彼らは望んでいたのです。ですから、世の中の人たちは彼らのことを「賢い者だ」と呼んでいたのです。問題は、世はそうにも呼んでも神がどう呼ばれるかです。

パウロは皆さんもご存じのように大変優秀な人物でした。他の多くの人々よりも学問を積んでいました。ですから、アグリッパ王とフェストが彼をさばいたときにフェストはこう言っています。「パウロがこのように弁明していると、フェストが大声で、「気が狂っているぞ。パウロ。博学があなたの気を狂わせている」と言った。」（使徒26：24）と。パウロが学問を積んでいるということにみな気づいたのです。ですから、パウロは自分の知恵を自慢することができたのです。彼は自分が学んで来たこと、自分にあるその知恵を誇示することができたのです。しかし、彼はそうしなかった。なぜしなかったのか？人々が称賛するこの世の知恵がいかににはかないものであるか、そのことを知っていたからです。

確かに、この世の知恵は人間の称賛をもたらし、人間の歴史にその名を刻むかもしれません。優秀な人だったと。しかし、パウロが言ったように、また、パウロが教えるように、パウロ自身が歩んだように、私たちにとって大切なことは、神からの称賛であり、歴史ではなくて、いのちの書に名を刻むことではありませんか。どんなに歴史に名を刻んでも、その人がいのちの書に名をいただいていなければ、その人は永遠の滅びに至るわけです。私たちが望むのはこのいのちの書に名を記していただくことです。ですから、パウロはそのいのちの書に名を記していただくために、この世の知恵は全く役に立たないと、そんなものを誇る思いは毛頭なかったのです。ですから、人々が彼のことを「愚か者だ」と言ったとしても彼にはどうでも良かった。彼が望んでいた評価は神からだけのその評価だったからです。

3) この世の弱い者 10 b 節

10 節では続いて「私たちは弱い、あなたがたは強いのです。」とあります。コリント教会の人たちは自分たちのこと「自分は強い、自分は何でもできる」とそのように思っていました。そう思っている人はコリントだけではなく、どの国にもどの時代にもたくさんいます。もしかすると、私たちもそうだったかもしれません。でも、正直なところ、そうでないことをみんな知っています。ただ、そのように認めたくないだけです。パウロがいうことは「本当に強い人とはどんな人なのか」です。確かに、パウロたちはこの世から「弱い者」だと見られていました。というのは、そのように見られることはギリシャ人にとっては大変屈辱的だったからです。「自分たちは強い」と、そのように見られたかったのです。でも、パウロは言うのです、「我々は弱い」と。

皆さん、「弱い人が神の前には強い」のです。自分の弱さを本当にわかった人は、自分の知恵や力に頼って物事をしようとはしません。神に従って行くというその歩みにおいて、自分の弱さを知っている人はそれに自分の知恵や力で従っていくことが出来ないで、当然、備えられた神の助けに依存します。

そして、神がお働きになるときに私たちは神の御力を見るのです。限られた人間の力でどんなことをしてもそれは神の前からすれば比較にもならないものです。自分は強いと思っている人は神のところに行こうとはしないのです。自分でやろうとするのです。そこには限界があります。でも、自分の弱さを知っている人は神のところに行き、神は私たちを通してご自身のみわざを為してくださるのです。

ですから、パウロは「わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」という主のみことばを知ります。それを知ったときに言います。「私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」と。Ⅱコリント 12:9、10「:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。:10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」、クリスチャン生活というのは救われる前とは全く違う生き方をするのです。救われる前の生き方は、自分の知恵や力に頼って生きようと、そのように周りも鼓舞するし自分たちもそう信じて生きて来ました。でも、そこには限界があるので、イエスを信じて救いに与った私たちは、自分の知恵や力ではなく神の知恵や力に頼って生きるのです。なぜそれが大切なのか？それが神が私たちに意図されていることであり、その歩みを通して神のみわざが成されるからです。神の力が私たち信仰者にとっての本当の力なのです。

ですから、世の中がパウロたちを「あなたたちは弱い」と言い、パウロたちもそう信じていた。でも、実際は彼らは強かったのです。

4) この世の卑しめられる者 100-13節

「あなたがたは榮譽を持っているが、私たちは卑しめられています。」と。「あなたがたは榮譽を持っている」、つまり、この世によってあなたがたは尊重されている、敬われているという意味です。「卑しめられている」とは「尊ばれない、尊敬されない、屈辱、また軽蔑される」という意味です。パウロは、私たちクリスチャンは、また、この主の働き人、使徒たちは、この世の人々からは尊ばれないと言います。それは今の私たちも経験することだと思います。皆さんが神を第一にして、神のことを人々に話していると、世の中の人たちは皆さんを尊敬するかと言うと、その逆のことが起こることの方が多いですね。「変わり者だ」と言われるかもしれない。「もう宗教ガチガチだ」とか、いろんなことを人々は言います。

神のために生きよう、神に喜ばれるように生きようと思えば思うほど、世の中との摩擦は出て来るのです。まさに、パウロたちがそうだったのです。彼らは神のために一生懸命生きようとした。神を第一にし神に喜ばれることだけを選択しようとした。神のことを誇っていたゆえに、神のことをどこでもすべての人に語ろうとしていた。そうすると、世の中は彼のことを軽蔑したのです。でも、あなたがたはこの世から敬われていると。皆さんはどちらを望みますか？この世から敬われることか、それとも、神が喜んでくださることか…？

こうしてパウロは、コリント教会の人々のフォーカスがこの世であったことを明らかにするのです。彼らはこの世での評価を求めたのです。この世の人々がどう思うかしか考えていないのです。パウロは言います。「私たちは神がどう思われるのか、神の評価だけを考えている」と。そこで、11-13節で11個の自分たちが経験して来た様々な苦難のリストを並べるのです。

* パウロたちが経験して来た様々な苦難

この世の中が私たち信仰者にとっていかに住みにくい所なのか、そのことを彼は告げます。「:11 今に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、虐待され、落ち着く先もありません。:12 また、私たちは苦勞して自分の手で働いています。はずかしめられるときにも祝福し、迫害されるときにも耐え忍び、:13 ののしられるときには、慰めのことばをかけます。今でも、私たちはこの世のちり、あらゆるもののかすです。」

(1) 飢え (2) 渇き (3) 着る物もなく : 確かに、Ⅱコリントには大変な苦しみに遭遇したことが記されています。11:24~「:24 ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、:25 むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。:26 幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、:27 勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渇き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」

(4) 虐待され : この「虐待」ということばは「拳で殴られる」という意味です。しかも、奴隷を殴ったり、犯罪人を殴るように侮辱を込めて殴ることです。皆さん、パウロたち、この信仰の勇者た

ちを人々はこのように扱ったのです。当然ですね。主がこの世にお見えになったときに人々は彼をどのように扱ったのか？最終的にはみな声を揃えて「十字架につけろ！」と叫びました。

(5) **落ち着く先もなく** : これは寝るときにその上に屋根がないということです。つまり、ホームレスのことです。そんな状態だったと言います。

(6) **苦勞して自分の手で働く** : 「苦勞する」という動詞は「くたくたになるまで働く」という意味で、もう疲れ切っている状態です。彼は過酷な仕事に関わっていたのです。実は、これはギリシャ人にとっては喜ばしいことではなかったのです。なぜなら、ギリシャ人はこのような肉体労働は奴隷にふさわしいものとして軽蔑したからです。

(7) **はずかしめられる** : これは「口汚くののしられる、人々から悪口を言われる」ということです。今見て来たように、犯罪人のように扱われ、そして、そのように扱われるということは、扱う人たちの心中に嫌悪感があるからです。まさに、それは行動だけでなくことばにも出るのです。彼らを口汚くののしったと言います。でも、見てください。「はずかしめられるときにも祝福し、」と、辱められるときにもパウロたちは「祝福し」と書かれています。自分たちを口汚くののしる者たちにパウロたちは、彼らに祝福があるようにと祈るのです。これはイエスが教えてくださったことそのものです。マタイ5:44「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」、パウロたちはそのように生きていたのです。自分たちを迫害しようと口汚くののしろうと、パウロたちは神が喜ばれること、神の祝福を願ったのです。

この「祝福し」は現在形です。そのように生き続け、そのように祝福を与え続けたのです。まさに、パウロはみことばを実践し続けたのです。だから、パウロは言います。ローマ12:17「だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。」と。21節には「悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」とあります。Iテサロニケ5:15「だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行うよう務めなさい。」、パウロはこのようにしてみことばを教えたのです。人の行う悪に対して悪で応じてはならないと。人があなたにどんな悪を為したとしても、あなたは悪で応じてはいけない、かえって、神がお喜びになる善を行いなさいと言うのです。

恐らく、皆さんもいろんな経験をされていると思います、実際に人間的に言うと、人の悪に対して善で応じるといえるのは大変難しいことでしょう。でも、神の助けによってできるのです。神が私たちに要求されることは、人間の力ではとうてい不可能なこと、余りにもハードルが高すぎるようなことです。でも、神の助けによってそれが可能なのです。なぜなら、パウロたちはそのようにして生きたからです。いや、パウロだからできたのだと、そんな言い訳は通用しません。なぜなら、パウロは言ったのです。「私は弱い、人々がそう言う」と。でも、弱さに気づいたパウロは、信仰者としてどのように生きるのかを学んだのです。自分の弱さに気付くことは大切なことです。それに気付いたときにやっと私たちは与えられた本当の力に頼って生きるからです。神の力です！こうしてできたのはパウロの信仰が強かったからではない、パウロが神の力を知っていたからです。その力を信じたのです。そして、このように歩むことを神が可能にくださったのです。

ペテロも言っています。Iペテロ3:9「悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。」と。みな、こうして生きたのです。どんなに私たちのことを悪く言われようと侮辱されようとそんなことは構わないのです。人が私たちに為す悪に対して私たちはそれを防ぎようがありません。私たちが防がなければいけないのは、私たち自身が同じ罪を犯さないことです。私たちが神に求められていることは、どんな時でも神がお喜びなることを為すことです。その力を神はくれるのです。

皆さん思い出してください。私たちは悪に対して悪で報いたこともあるでしょう。「売りことばに買いことば」で言うてはいけないこと、言うべきでないことを口にすることもあるでしょう。そう考えることもあったでしょう。そのときに気付かれましたか？いっぺんに喜びが無くなったと。神が喜ばれないことをしたからです。神が望んでおられることを神の助けによって私たちは為すことができるのです。こうしてパウロもペテロも生きたのです。彼らが教えるのは、あなたがたも同じように生きることが可能だ、なぜなら、同じ神があなたの神だからということです。彼らははずかしめられるときにもそのような人々に祝福を与えたのです。

(8) **迫害される** : すでに見て来たように、信仰ゆえに迫害を困難を経験しました。でも、彼らは神に対して不平不満を述べたのではなく、彼らは耐え忍んだのです。なぜか？神を信頼していたからです。必ず、神のみわざが成されることを信じたのです。こうして信仰の勇者たちは信仰を守り通したのです。必ず神がみわざを成してくださると。

(9) ののしられた : 人々からののしられたときにどうしたのか？慰めのことばをかけたと言います。聖書の欄外には「優しく答えます」とあります。人があなたをののしるときに感情的に怒りをもって答えるのではなくて「優しく答える」と言うのです。こういうことは神の助けによって可能なのです。もう一つ言えることは、こうして彼らが生きることによって彼らは神の栄光を現したのです。そして、みことばが私たちに言うことは「こうして生きることが私たちにも可能だ」ということです。それが大切なのは、そのようにして私たちが生きることによって、私たちは神の栄光を彼らと同じように現わすことが出来るからです。

(10) 世のちり : 「今でも、私たちはこの世のちり、」と書かれています。この「ちり」とは「捨ててしまうもの、廃物」です。つまり、役に立たなくなったもの、用いられなくなって捨てられるものです。掃除をした後ごみがいっぱい出て来ます。それは捨てます。大事にとって置く人はいません。これはそういう意味です。まさに、そういうごみのような存在だと言っているのです。

(11) あらゆるもののかす : 「あらゆるもののかすです。」とあります。「ちり」と似ていますが、この「かす」というのは「汚い器の汚れをこすり落とした後に出て来るくず」のことです。そっと掃いて出て来たゴミだけでなく、こびりついた汚れを削ぎ落としてそこで出て来たゴミのことです。どちらにしても、必要でないから捨ててしまうものです。パウロは自分たちはそのような者としてこの世の人々から見られていたと言うのです。

これがパウロたちがこの世で経験した苦難であり、そして、このように人々から見られていたのです。気付かれるでしょう？彼らはそのように見られることを決して不満に覚えていません。コリントの人た

ちはパウロたちのことを非常に高く誇っていました。そのパウロたちが言うのです。「我々はこの世の中で最も軽蔑されている者たちだ。」と。

パウロが言いたかったことは、私たちがクリスチャンとしてこの地上を生きるとき、そこにはいろんな困難や苦しみが伴うということです。人々はあなたや私を奇異な存在と見るかもしれません。時にはあなたの信仰ゆえに、その忠実さゆえに、あなたのことを嫌悪するかもしれない。しかし、それでも私たちは主に従って行こうとするのです。なぜか？それは主がそのように生きて私たちに模範を示してくださったからです。私たちが経験したこともない苦難をイエスは経験されました。それでも、死に至るまでも父なる神のみこころに徹底して従っていかれました。その生き方が神の栄光を現したのです。それが私たちの模範であるゆえに、私たちもそのようにして生きて行こうとするのです。

同時に、こんな大変なことがあるのに私たちはなぜ主に従って行くのか？簡単です。そのように生きることを主が喜んでくださるからです。私たちはこの主を喜ばせるために生きているのです。このような犠牲を払ってこのような恵みを与え続けてくださり、至れり尽くせりの神に対して、私たちができることは「何とかこの神に喜んでいただきたい！」です。そのためには、この方に忠実に従うことです。だから、私たちはいつもイエスの十字架を見上げることです。しっかり思い出さなければいけません。忘れてはいけません。あなたに対して主が払ってくださった大きな犠牲を…。この方はあなたの身代わりとなって十字架で死に、その死から敢然とよみがえり今も生きておられます。その方を私たちはしっかりと覚え続けることです。

そして、あなたが主が何を為してくださったのかを覚えるときに、間違いなくあなたの心の中には「何とかこの神に喜んでいただきたい！」という思いが改めて湧き上がって来るでしょう。そして、そのときにどんな困難が伴おうと、この主に従い、この主のためだけに生きたいと新たな決心に導かれていくでしょう。そして、こんなにもすばらしいお方をこの世に証できる喜びにあなたの心は満たされていきます。「主よ、感謝します。あなたのために生きることができていることを感謝します。そして、あなたが望んでおられるように私は生きていきたい！このようにあなたが望んでおられる以上、そのように生きてあなたのすばらしさを世に証していきたい。」と言います。

信仰者の皆さん、こうして生きるのです。こうしてパウロたちは生きたのです。みことばは私たちに希望をくれます。私たちもこのように生きることが出来るという希望です。そして、この生き方が神の栄光を現すものであり、この生き方が神の前に価値ある生き方なのです。そのように生きて神に喜んでいただきましょう。